

概念メタファーの体系性，生産性はどの程度か？

被害の発生に関係するメタファーの成立基盤の記述を通じて

黒田 航

独立行政法人 情報通信研究機構 知識創成コミュニケーション研究センター

はじめに

この論文の主張は，大きく分けて二つある．第一に，概念メタファー理論 (Conceptual Metaphor Theory: CMT) [Lakoff 1993, Lakoff & Johnson 1980, Lakoff & Johnson 1999, 鍋島 2002, 鍋島 2003, 谷口 2003] を批判的に検討し，それが体系的に過剰般化に導く不良理論であることを主張する．第二に，問題の過剰般化は，概念メタファー理論の説く「メタファーは元領域から先領域への概念写像である」という定式化を受け入れる限り，不可避であるが，これは，メタファーの成立単位が状況という比較的小さな概念単位だと考えることで合理的に解消しうる問題であると主張する．

1 メタファーの理解の際のフレーム的知識の重要性

CMT は，言語学 —特に認知言語学派— 内部で強い影響力をもつメタファーの理論であるが，それが目ざしている方向，説明の原理には問題がないわけではない．この論文の目的は筆者らが開発を進めているフレーム指向概念分析 (Frame-Oriented Concept Analysis of Language: FOCAL) [黒田ほか 2004a, 黒田・野澤 2004a, 黒田・野澤 2004b] という (意味) フレーム 基盤の意味記述の枠組みが CMT の問題点を克服し，メタファーの効果と成立条件の妥当な記述に有効であることを示すことである．FOCAL は Berkeley FrameNet (BFN)¹⁾ [Fontenelle 2003] の概念的拡張である．拡張の内容，その動機については，[黒田・井佐原 2004, 黒田ほか 2004b, 黒田ほか 2004c, 中本ほか 2004a] を参照．

¹⁾ <http://www.icsi.berkeley.edu/~framenet/>

1.1 潜伏性の上位スキーマ化媒介モデル

[黒田・野澤 2004a] は意味フレーム基盤の概念分析の観点から、CMT に対し以下のような問題点を指摘した:

- (1) CMT の基本概念である 領域 の定義は曖昧すぎるが、“写像の単位は (状況理解の単位としての) 意味フレームである” と言い直せば、より制約されたメタファー写像の定式化が可能となる
- (2) CMT はメタファー現象の記述的一般化以上のことをなし得ているわけではなく、メタファーが存在する根本的理由を説明するためには無力であるが²⁾、それは次の潜伏性の上位スキーマ化媒介モデルで説明できる:³⁾
- (3) あるフレーム F (元領域に相当) から別のフレーム G (先領域に相当) へのメタファー写像関係 M が成立するのは、(i) G が字義通りに解釈され、(ii) 次の条件を満足する H が M を媒介にするとき (i.e., $M(x) = i(h(x))$) に限る:
 - a. 意味フレームは状況をコードするスキーマであり、(意味) 素性の組織化として記述しうる
 - b. $F[+f]$, $G[-f]$ に素性 f の値に対立があるとき、その対立を中和することで抽象化が達成され、それにより (F, G に共通の) 上位スキーマ $H[\pm f]$ が得られる。
 - c. この対立素性の中和の操作 $h: F \rightarrow H/G$ を F の (G との適合のための) 上位スキーマ化と呼ぶ

(3) の内容は概念図 1 に示した。明らかに、 F, G はいずれも、 H の具現化であるが、メタファーの特殊な点は H (の構築と利用) が潜伏性だという点にある。

この枠組みでは、概念メタファーの成立条件は、次のようなものである:

- (4) a. 一つの複合的表現 (語句, 文) が F, G で特定される二つの異なる意味フレームに言及し、
- b. F, G が共通の上位クラス (あるいはスキーマ) H の実例であり、 F が H というクラスの代表例であるか、少なくとも F が G より顕著な H の実例のとき、
- c. F を元 (領域) とし、 G を先 (領域) とするような概念メタファー $\llbracket G$ は F である \rrbracket が成立する。

このようなメタファーの定式化をメタファーの上位スキーマ化媒介モデルと呼ぶ。そのわけは、この定式化では、 F から G へのメタファー写像 M は、 F から派生した潜伏性の概念

²⁾ 詳細は [黒田 2004] を参照されたい。

³⁾ 私の提唱する上位スキーマ化媒介モデルは、概念ブレンド理論 [Fauconnier 1997, Fauconnier & Turner 1996] と幾つかの点類似するが、両者は同一ではない。例えば上位スキーマ媒介モデルでは領域を結ぶコネクタの種類は具現化 (図 1 の i に相当) と抽象化 (図 1 の h に相当) の二種類しか認められていない。

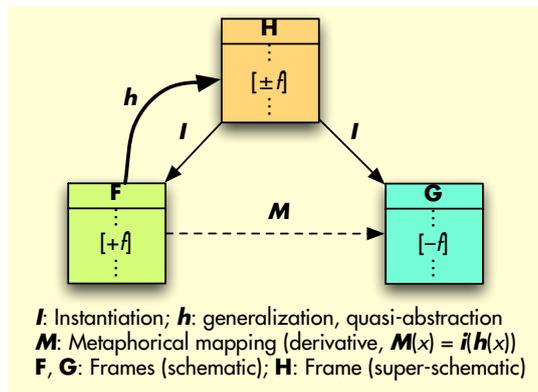


図1 上位スキーマ H を経由した写像 M の媒介: F は元領域, G は先領域に相当

クラス H による G の下位クラス化だからである。 F から H の「派生」は、 G によって強要される。

次の点は潜伏性の上位スキーマ化媒介モデルの自然な帰結である:

- (5) メタファー写像で保存されると主張される認知的トポロジー、イメージスキーマの内実は(意味)フレームである。

上位スキーマ化媒介モデルに基づいたメタファー分析の有効性を示した重要な研究成果の一つとして [野澤 2004] がある。これは [黒田ほか 2004d] に紹介した。

1.2 メタファー写像の保守性の仮説

[野澤 2004] の結果は、次のメタファー(写像)の保守性の仮説の定式化の動機となった:

- (6) a. メタファー(写像)の成立条件は、基本的に状況基盤であるという意味で、個別的で保守的なものである。
 b. メタファーは、CMT で示唆されるよりも体系性、生産性が低く、メタファー写像は起こりにくい。

私たちが(概念)メタファーの保守性と呼んでいる事実は、例えば次のメタファー表現に少なからず新規性が伴うという事実である:

- (7) a. 彼はとうとう、その困難な理論(の構築)に { ?着工; 着手 } した。
 b. 彼は食事をしながら、その込み入った { 証明; 説明 } の { ?設計図; 見取り図; 青写真 } を思い描いた。

概念メタファー理論が説くように、(概念)メタファーが生産的、体系的なものであるならば、これは不自然な現象である。実際、これらの表現に新規性が伴うという事実によって示

唆されるのは、(7a, b) の「着工, 設計図」を使うような表現が無条件に「理論は建築物である」という概念メタファーから派生するわけではないということである。これが正しいとすれば、CMT はメタファーの一般性, 体系性, 生産性に関して過剰な一般化を行っている疑いが強い。

CMT はこの種の過剰般化を避けることができない。(7a, b) のような事例が, 新規性が伴うにせよ, メタファーとして成立する以上, これを「先領域の覆し」(target domain overrides) [Lakoff 1993] の名の下に説明するのは不可能である。

実際, CMT はこの種の過剰般化を体系的に生みだし続け, それを止める気配は一向にない。これが CMT の根本的な欠点だと私は考える。この論文の目的は, 意味フレーム分析の結果に基づいてメタファー写像への制約を特定し, (6) の証拠を追加することである。

2 意味フレームに基づく概念分析の基礎

この節では §3 以降の議論の準備として, その下地になる意味フレーム基盤の概念分析の基礎を論じることとする。

2.1 「襲う, 襲われる」の用法空間

[黒田ほか 2004a, 黒田ほか 2004d, 黒田ほか 2004b, 中本ほか 2004b] は, (8) の意味理解 = 解釈が (9) に挙げた 15 個の個別的な状況のどれか一つへの対応づけによって達成されることを示した。

(8) a. x が y を襲う。

b. y が x に襲われる。

(9) **F01**: $\langle x, y$ のあいだの武力抗争による y への被害の発生 \rangle ; **F02**: $\langle x$ の侵略による y への被害の発生 \rangle ; **F03**: \langle 資源強奪による y への被害の発生 \rangle ; **F04**: $\langle x$ の弱者虐待による y への被害の発生 \rangle ; **F05**: $\langle x$ の強姦による y への被害の発生 \rangle ; **F06**: \langle 個体 x の他個体 y への攻撃 (捕食目的) による被害の発生 \rangle ; **F07**: \langle 個体 x の他個体 y への攻撃 (非捕食目的) による被害の発生 \rangle ; **F08**: \langle 不慮の事故 x による y への被害の発生 \rangle ; **F09**: \langle 自然災害 (小規模) x による y への被害の発生 \rangle ; **F10**: \langle 自然災害 (大規模) x による y への被害の発生 \rangle ; **F11**: \langle 疫病の流行 x による y への被害の発生 \rangle ; **F12**: \langle 社会的災害 (=活動への打撃) x による y への被害の発生 \rangle ; **F13**: \langle 発病 (非一時的) x による y への被害の発生 \rangle ; **F14**: \langle 発症 (一時的) x による y への被害の発生 \rangle ; **F15**: \langle 悪感情 (一時的) x による y への被害の発生 \rangle

(9) がどのような関係にあるかは, 図 2 に示した。この図を意味フレームの階層ネットワークと呼ぶ。

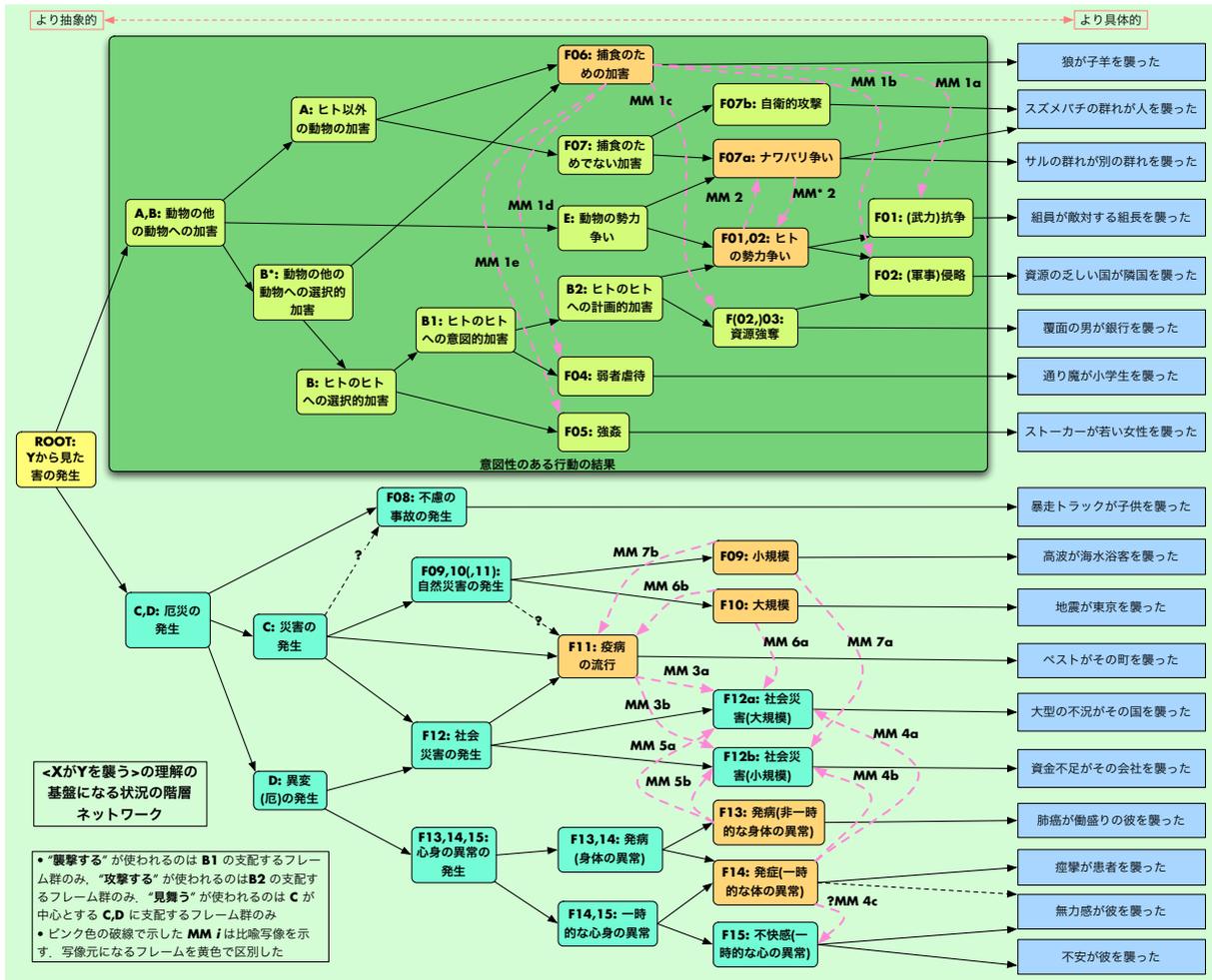


図2 “x が y を襲う”の解釈可能性を決定する意味フレームの階層ネットワーク

図2にあるような意味フレームの体系化は、従来の言語学者の直観のみに基づく分析と異なり、心理実験によって心理的妥当性が確認され、結果が [黒田ほか 2004a, 黒田ほか 2004b, 中本ほか 2004b] に報告されている。ただし、図2は、すでに公表されている内容を図3に示した語彙調査の結果に基づいて改訂したものである。

2.2 意味フレームへの引きこみ効果

重要なのは、(9)に列挙した状況が(8)の解釈可能性の全体を定義するという点である。この性質故に、(8)の意味解釈は(9)のどれか一つへ「引きこまれる」。これを意味フレームへの「引きこみ効果」と呼ぶ。これは意味解釈におけるトップダウン効果である。

もう一つ重要なのは、メタファー(並びにメトニミー)も同様に、個別の意味フレームへの引きこみ効果として記述できる見通しが得られるということである。本稿の目的の一つは、

このアイデアに内実を与え、有効性を示すことにある。

3 「襲う、襲われる」のメタファー的用法の成立条件

3.1 能動的加害 (G1) と受動的被害 (G2) の大別

n=10	文	襲った	攻撃した	襲撃した	見舞った	襲いかかった
F01	敵対する二人の組員が組長を ____	2.0	1.6	1.9	0.2	2.0
F01	暴徒と化した民衆が警官隊を ____	2.0	1.9	1.8	0.0	2.0
F01	森の西側の部族が北側の部族を ____	2.0	1.9	1.9	0.2	1.8
F02	資源の乏しい国が隣国を ____	2.0	2.0	1.6	0.2	1.5
F02	ドイツの戦車部隊がパリを ____	2.0	1.9	1.7	0.0	1.5
F02	テロリストの集団がアメリカ軍基地を ____	1.9	1.9	1.9	0.0	1.4
F03	二人組の強盗が都内の銀行を ____	2.0	0.8	2.0	0.0	0.8
F03	外国人のグループが現金輸送車を ____	2.0	0.8	2.0	0.0	1.4
F03	覆面をかぶった男が銀座の宝石店を ____	2.0	0.5	1.8	0.0	0.7
F04	通り魔がその小学生を ____	2.0	0.7	1.0	0.0	2.0
F04	5,6人の少年たちが公園にいた浮浪者を ____	2.0	1.1	1.4	0.2	2.0
F04	23歳無職の男性が何人かの通行人を ____	2.0	0.8	1.4	0.0	2.0
F05	ストーカーが近所の女性を ____	2.0	0.2	0.7	0.2	2.0
F05	無職の男が一人暮らしの若いOLを ____	2.0	0.2	0.6	0.2	2.0
F05	店長がアルバイトの女子店員を ____	1.9	0.6	0.4	0.2	2.0
F06	サメが傷ついたイルカを ____	2.0	1.0	0.7	0.0	1.8
F06	ライオンがインバラの群れを ____	2.0	0.9	1.0	0.0	2.0
F06	ハイエナの群れが国立公園の監視員を ____	2.0	0.7	0.8	0.0	2.0
F07	スズメバチの大群が子供達を ____	2.0	1.1	1.1	0.0	1.9
F07	イノシシがキノコ採りに来ていた男性を ____	1.9	0.7	0.6	0.0	1.8
F07	毒蛇が41歳の登山客を ____	1.9	0.8	0.5	0.0	1.9
F08	交通事故が買い物帰りの主婦を ____	2.0	0.0	0.1	0.4	1.3
F08	暴走したトラックが大通り沿いの保育園を ____	1.4	0.0	0.1	0.2	1.2
F08	大きな災難が原発付近の住民を ____	2.0	0.0	0.1	0.6	1.7
F09	突風がテレビのリポーターを ____	1.8	0.1	0.1	0.5	1.1
F09	土砂崩れが民家を ____	2.0	0.1	0.1	0.7	1.7
F09	鉄砲水が避難する住民を ____	2.0	0.1	0.1	0.5	2.0
F10	大洪水が東海地方を ____	2.0	0.1	0.2	0.7	1.4
F10	大型台風が日本列島を ____	2.0	0.1	0.2	0.8	1.3
F10	直下型地震が神戸を ____	2.0	0.1	0.2	0.9	1.1
F11	悪性のインフルエンザがアジア諸国を ____	2.0	0.1	0.1	0.7	1.1
F11	ペストが川沿いの町を ____	2.0	0.1	0.2	0.8	1.1
F11	エイズがアフリカの国々を ____	1.8	0.1	0.1	0.8	1.0
F12	大型の不況が南米の国々を ____	2.0	0.1	0.0	0.8	1.2
F12	株価の暴落が株式市場を ____	1.9	0.1	0.0	0.8	1.1
F12	狂牛病問題が畜産業界を ____	1.6	0.1	0.0	0.7	1.3
F13	悪性のガンが働き盛りの男性を ____	1.7	0.1	0.0	0.6	0.9
F13	脳卒中が隣のおじさんを ____	1.4	0.0	0.0	0.6	0.9
F13	拒食症が知人の妹を ____	1.4	0.0	0.0	0.5	0.6
F14	痲痺が難病の少女を ____	1.5	0.1	0.0	0.4	1.3
F14	眠気が雪山遭難者を ____	1.9	0.0	0.0	0.4	1.2
F14	脱力感が仕事上の男性を ____	1.9	0.0	0.0	0.5	0.8
F15	言いようのない不安が敏腕の社長を ____	1.9	0.0	0.0	0.4	1.4
F15	激しい嫉妬がいつも温和な若者を ____	1.5	0.0	0.0	0.4	1.0
F15	罪悪感が万引きした少年を ____	1.7	0.0	0.0	0.4	0.8

[2.0,1.4] 橙; [1.3,0.6] 黄; [0.5,0.3] 緑

図3 「襲う、攻撃する、襲撃する、見舞う、襲いかかる」の容認度分布 [最大値 = 2; 最小値 = 0]

まず、(8)の用法空間のメタファーと非メタファーの大域的区分を確定しておこう。

図3に示すように、(9)にある状況は、F01-F07のグループ(G1)とF08-F15のグループ(G2)とに大きく分かれる。G1は襲い手が生物で意図をもつ場合、G2は襲い手が無生物で意図をもたない場合である。「攻撃する」「襲撃する」が使えるのはG1で、「見舞う」が使えるのはG2である。「襲う」の用法に関して言うと、大局的に見れば、G1は非メタファーで、G2はメタファーだと言えるような区別がある。この区別を概念メタファーで特定するとすれば、「加害体は獰猛な動物である」とでもなるだろう。

だが、G2がメタファーでG1が非メタファーだと単純化できるほど「襲う、襲われる」という語の実際の用法は単純ではない。現実はずっと複雑である。まず、G1の内部にもメタファーが存在するし、更に、G2の内部でも別のレベルのメタファーが存在するからである。この点を幾つかの個別的なメタファーを検討することで明確にしよう。

なお、以下で取りあげるメタファーの意味は、図2に示した加害/被害の成立する状況の階層ネットワークに基盤をもつものだが、それは「襲う」の意味から独立に成立する。このため、被害の発生に関して「襲う」という語が選択的に語彙化している[被害発生の突然さ]、[予測の困難さ]のような特徴が、「襲う」を使わないメタファー(例えば「苦しむ、侵略する」)に常に認められるわけではない。

3.2 意味フレーム基盤のメタファー群

3.2.1 F06: 〈捕食のための加害〉を元領域として理解されるメタファー

〈yがxの餌食になった〉はF06を元領域として理解される表現である。例えば、次のメタファーがこれに含まれる:

- (10) a. 小さな子会社がその男(の野心)の餌食になった。[MM1a: F01が先領域]
- b. 資源の豊かな小国がその大国(の野望)の餌食になった。[MM1b: F02が先領域]
- c. 身寄りのない老人がその男(の貪欲)の餌食になった。[MM1c: F03が先領域]
- d. 数名の児童がその男(の狂気)の餌食になった。[MM1d: F04が先領域]
- e. 三人の女性がその男(の欲望)の餌食になった。[MM1e: F05が先領域]

これらのメタファーは「欲望は食欲である」という概念メタファーを仮定することで認可できるように見える。だが、これはフレームB*: 〈動物個体の他の個体への選択的加害〉がF06とBの共通の上位スキーマとして存在することによって派生すると考えられる。この際、(i) Bの中核的特徴である〈獲物の選択〉が〈欲望〉によって決定され、(ii) F06の中核的特徴である〈食欲の満足〉が欲望の満足の代表例だと見なされることを認めれば、十分である。

3.2.2 E の支配領域で成立する〈侵略〉のメタファー

〈x が y の領土を侵略した〉, 〈x が y の領地に侵攻した〉, は F01,02 を元領域として理解される。例えば, 次のメタファーがこれに含まれる:

(11) その(猿の)群れは別の群れの { 領土を侵略; 領地に侵攻 } した。[MM2]

ただし, この例がメタファーであると認定するには注意が必要である。次の二つの例を較べると, (12) が (13) に対しメタファー的拡張の事例であることがわかる:

(12) その会社は別の会社の { 領土を侵略; 領地に侵攻 } した。

(13) その国は別の国の { 領土を侵略; 領地に侵攻 } した。

(11) と (13) はいずれも E: 〈動物の勢力争い〉という状況の特殊な事例である。

次のような F07a を元領域とするメタファーがありうることを考えると, E に支配されるフレームのあいだの概念的対応はメタファー写像の産物であるというより, 共通のスキーマ E の実現による派生的効果だと考える方が, ずっと辻褄が合う:

(14) その会社は別の会社のナワバリ { を侵略; に侵攻 } した。[MM* 2]

興味深いのは, F07a を元領域にするメタファーの存在が F07b を元領域とするメタファーを許すわけではないという点である。これは領域とは何かの詳細に述べられない限り, 概念メタファーの記述は不十分だということを意味する。以下では同様の例を幾つか取り上げる。

3.2.3 F11: 〈疫病の流行〉を元領域にするメタファー

〈x が y に蔓延する〉, 〈x が y にはびこる〉, 〈x が y に流行する〉の理解基盤は F11 である。次の表現は, いずれもその例となる:

(15) a. 恐るべき疫病がその地方に { 蔓延していた; はびこっていた; 流行していた }。

b. 恐るべき人材不足がその業界に { 蔓延していた; ?*はびこっていた; *流行していた }。[MM3a]

c. 恐るべき不正がその会社に { 蔓延していた; はびこっていた; ?*流行していた }。
[MM3b]

これらは F12: 〈社会災害の発生〉, あるいは C: 〈災害の発生〉を上位スキーマをもつことで可能となる写像である⁴⁾。

⁴⁾ C が共通の上位スキーマである場合, F11 を元領域に, F09, F10 を先領域にするメタファーが成立することが予測されるが, これは正しくない。これは明らかに現時点での意味フレームの階層ネットワーク (図 2) に基づく説明の難点であるが, これは C と F12 のあいだにもう一つ F11, F12 のみを支配する別のフレーム C1 が潜伏していると考えれば, 回避できる可能性がある。

3.2.4 F13: 〈発病〉, F14: 〈発症〉を元領域にするメタファー

(16a, b) は F14 を元領域とするメタファーである:

- (16) a. その人は突然, { (心臓) 発作; 血圧降下 } に襲われた .
 b. その国は突然, { インフレ; 株価の暴落 } に襲われた . [MM4a]
 c. その会社は突然, { 資金難; 経営難 } に襲われた . [MM4b]

これに対し, 〈y が x に/で苦しむ〉, 〈y が x を煩う〉, 〈y が x を病む〉, 〈y が x に罹る〉は F13 が理解の基盤である . 例えば, 次の表現は, いずれも F13: 〈非一時的な病気 (の症状) による被害〉が理解のベースとなる:

- (17) a. その人は奇妙な病気 { に/で苦しんでいる; を煩っている; ??を病んでいる; に罹っている } .
 b. その国は { 独裁 (主義/体制); 官僚主義; } { に/で苦しんでいる; ??を煩っている; ??を病んでいる; *に罹っている } . [MM5a]
 c. その会社は { ワンマン経営; 日和見経営 } { に/で苦しんでいる; ??を煩っている; ??を病んでいる; *に罹っている } . [MM5b]
- (18) a. その人は奇妙な症状 { に/で苦しんでいる; ??を煩っている; ??を病んでいる; *に罹っている } .
 b. その国は未曾有のインフレ { に/で苦しんでいる; ??を煩っている; ??を病んでいる; *に罹っている } . [MM5a]
 c. その会社は { 人材不足; 資金不足; 経営不振 } { に/で苦しんでいる; ??を煩っている; ??を病んでいる; *に罹っている } . [MM5b]

以上の事例はどれも, D: 〈異変の発生〉を共通の上位スキーマをもつことで可能となる写像であるが, これに対し F14,15 を共通スキーマとする用法として, 次のような場合がある:

- (19) a. 彼は { 倦怠感; 虚脱感 } に襲われた . [F14]
 b. 彼は { 嫌悪感; 焦燥感 } に襲われた . [F15: ?MM4c]

これは, E を共通スキーマとする用法の場合と同様, メタファーと非メタファーの区別が困難である . 私は, このような例は, メタファー未満のカテゴリー化の拡張なのではないかと思う . 実際, (19b) のような微妙な例がメタファーだと強弁するならば, それを実証する十分に強力な証拠を揃えなければならないだろう . それをせず, 単に直観的な区別に基づいて (19b) が (19a) のメタファー的拡張だと言うのは, 単なる「説明のための説明」である .

3.2.5 過剰般化の問題，再び

F13: 〈発病 (非一時的)〉, F14: 〈発症 (一時的)〉 を元領域とするメタファーは，確かに互いに関連しているが，同一のものではなく，成立条件は個別的である．実際，メタファーのレベルでも「 y が x に/で苦しんでいる」と「 y が x を病んでいる」は x についての選択制限が引き継がれる．

これは例えば，(17b) の「その国は独裁 (主義) に/で苦しんでいる」や (17c) の「その会社はワンマン経営に/で苦しんでいる」や (18b) の「その国は未曾有のインフレに/で苦しんでいる」や (18c) の「その会社は人材不足に/で苦しんでいる」のような事例が存在することを根拠に {F13, F14} や {F13, F14, F15} を元領域として [[社会的災害は病気である]] や [[社会的災害は心身の異常である]] のような一般的な概念メタファーを述べるのは過剰般化だということである．

この種の過剰般化の効果を押えるために，写像には先領域の覆しがあると言っても，覆しの内実が述べられない限り，それは単なる逃げ口上にしかならない．重要なのは，理論的に「例外」と見なされて，先領域の覆しによって説明から排除されているものが，本当に「数が少なく，無視しうる」という意味での例外なのかどうかである．これまでに私が調査したすべての概念メタファーの事例で，理論的に予測できる「正しい」事例より，例外の方が多い．

実際，先領域の覆しが一般的な制約としては述べられず，メタファーの成立する状況ごとに異なるものとして述べるしかないものだとしたら，概念メタファーの一般化はいったい何のための一般化なのだろうか？ 極論すれば，概念メタファーを一般化して述べる必要など，事の始めから存在しないと疑いたくなるのも当然ではないだろうか？

要するに，概念メタファーの体系的性，生産性がどれほどのものなのか，実証的に検証されなければならないのである．以下では，この点を F09, F10 を元領域とするメタファーの詳細な分析を通じて，詳しく検討する．

4 災害の発生に関するメタファーはどれくらい体系的か？

図 2 の MM6, MM7 に相当する概念メタファーの生産性，体系的性を検証するため，(8b), (22) の容認度の評定実験を検討する．§4.1 で設定を，§4.2 で手順を，§4.3 で結果を説明し，§4.4 で考察を加える．

4.1 設定

(8) は， $y = \{ \text{国, 地域, 人} \}$ で x が (20) にある名詞の場合，F09 か F10 の実現例として読め， x が (21) にある名詞の場合，F12 の実現例として読める．

(20) 1. 台風; 2. 地震; 3. 津波; 4. 高波; 5. 大波; 6. 波; 7. 洪水; 8. 嵐; 9. 大雪; 10. 吹雪; 11. 雪

崩; 12. 山崩れ; 13. 地滑り; 14. 寒波; 15. 日照り

- (21) 1. 貧困化; 2. 資金不足; 3. 株価暴落; 4. 景気後退; 5. 合理化; 6. 赤狩り; 7. 肅正; 8. リストラ; 9. 改革; 10. インフレ

以下, 区別のために, (20) を x^* , (21) を x とする. この論文で特に問題にしようと思うのは, (22) の容認性が x, x^* の値によってどう変化するかである:

- (22) y が [x の x^*] に襲われた

4.1.1 概念メタファーの係わり方

(22) の [x の x^*] の部分には, x^* を元領域, x を先領域とする概念メタファー [Lakoff & Johnson 1999, 鍋島 2002, 鍋島 2003, 谷口 2003] が成立する. 概念メタファーを本稿では [[x は x^* である]] のように表わす. (23)–(24) に例を幾つか挙げる:

- (23) a. その国の政界はその年, 肅正の嵐に襲われた. [MM6a]
 b. その業界はその年, 改革の嵐に襲われた. [MM6a か MM7a]
 (24) a. その国はその年, 合理化の波に襲われた. [MM6a]
 b. その国の経済はその年, 景気後退の波に襲われた. [MM6a]

(23)–(24) の例は, 次の概念メタファー (25), (26) によって認可されたものだと考えられる:

- (25) [[\langle 社会的 (人為) 災害 \rangle は \langle 嵐 \rangle である]]
 (26) [[\langle 社会的 (人為) 災害 \rangle は \langle 波 \rangle である]]

それと同時に, これらは次の (27) にある, より一般的な概念メタファーの特殊な場合である:

- (27) [[\langle 人為災害 \rangle は \langle 自然災害 \rangle である]]

これをもし (28) のように書けば, [[一般例は特殊例である]] メタファー [鍋島 2002, Lakoff & Turner 1989] になるだろう.

- (28) [[\langle 災害 \rangle は \langle 自然災害 \rangle である]]

4.1.2 結論の先取り

以下で問題にするのは, (29) のような一般化はどこまで正しいかということである.

- (29) a. (23) \Rightarrow (25), (24) \Rightarrow (26)
 b. (25), (26) \Rightarrow (27)
 c. (27) \Rightarrow (28)

結論を先取りすると、(i) データを詳細な観察に基づく限り、(29a) の段階の状況基盤の一般化がもっともデータをうまく記述し、(29b) の段階の一般化では少なからず過剰般化が生じ、(29c) の段階の一般化では、もう例外の方が多いくらい過剰般化が著しいこと、(ii) この結果のもっとも素直な解釈は、概念メタファー理論は、(29a) の段階の記述的一般化の枠組みとしては興味深い、それが (29b)、(29c) のレベルの一般化に基づく「説明」を強弁する限り、体系的に過剰般化を生みだす不良理論としか評価できないというものである。

4.2 実験手順

n = 5	その会社	その部署	その人々	その国の政界	その業界	その国の経済	その国	その地方	その町
___はその年、貧困化に襲われた	0.0	0.0	1.4	0.8	0.8	1.4	2.0	2.2	2.2
___はその年、資金不足に襲われた	2.6	2.8	2.2	1.4	1.4	1.6	1.4	1.4	1.8
___はその年、株価暴落に襲われた	3.0	1.0	1.6	0.8	2.4	3.0	2.8	0.2	0.6
___はその年、景気後退に襲われた	1.6	0.8	1.0	1.0	2.6	2.6	2.6	1.6	1.4
___はその年、合理化に襲われた	1.2	2.0	0.6	0.8	1.8	1.2	0.8	0.6	1.0
___はその年、赤狩りに襲われた	0.6	0.4	2.0	2.4	1.0	0.2	1.8	1.2	1.2
___はその年、肅正に襲われた	1.0	1.6	2.0	2.0	1.2	0.0	1.6	0.6	0.8
___はその年、リストラに襲われた	1.6	2.6	3.0	0.4	2.0	0.2	0.4	0.2	0.2
___はその年、改革に襲われた	0.8	2.0	0.4	1.6	1.6	1.4	1.4	1.0	1.0
___はその年、インフレに襲われた	1.8	0.6	0.8	1.2	2.0	2.8	3.0	1.4	1.0

[3.0,2.0] 橙; [1.9,1.1] 黄; [1.0,0.6] 緑

図4 “y が x^* に襲われた” の容認度分布 [太枠の組み合わせを Q1–Q10 に使用]

次のような共起パターン $P1(x^*)$ – $P3(x^*)$, $Q1(x^*)$ – $Q10(x^*)$ の容認度を (30) の手順で調べた (いずれも、F12a か F12b で理解される)。Q1–Q2 のための y の選択基準は、図4 を参照。

P1: その国はその年、 x^* に襲われた。

P2: その地域はその年、 x^* に襲われた。

P3: その人はその年、 x^* に襲われた。

Q1: その地方はその年、貧困化の x^* に襲われた。

Q2: その会社はその年、資金不足の x^* に襲われた。

Q3: その国の経済はその年、株価暴落の x^* に襲われた。

Q4: その国はその年、景気後退の x^* に襲われた。

Q5: その国はその年、合理化の x^* に襲われた。

Q6: その人々はその年、赤狩りの x^* に襲われた。

Q7: その国の政界はその年、肅正の x^* に襲われた。

Q8: その部署はその年、リストラの x^* に襲われた。

Q9: その業界はその年、改革の x^* に襲われた。

Q10: その国はその年，インフレの x^* に襲われた．

(30) 評定基準 (数値が容認度に対する評定値)

- 3: 普通に言う
- 2: あまり言わないが，違和感は感じない
- 1: 普通は言わないが，言われたらわかる
- 0: 言わないだけでなく，言われても理解不能

4.2.1 被害の受け手の類型

図 4 からわかるのは，犠牲者 y に次のような多元的グループ化があるということである：

- (31) V1: 同一組織に属する集団: 会社, 部署, 人々
- V2: 同一社会階層に属する集団: 人々, 国の政界
- V3: 同一活動領域に属する集団: 国の経済, 業界, その国
- V4: 同一地域に属する集団: 国, 地方, 町

なお，この区別は，当然のように，メタファーの容認可能性に影響する．その詳細は後で述べる．

4.2.2 容認度の認定基準のデザイン

(30) の基準は，単に評定対象の表現が容認可能性であるか否かだけでなく，それが慣習的かどうかという慣習性にも気を使って判断してもらうように意図してある．これは概念メタファーの慣習性とその体系性，生産性との関係をなるべく明示するための工夫である．一般に，慣習性と体系性，生産性は相克する関係なので，慣習的メタファーが体系的である概念メタファー理論の主張には根本的矛盾が潜んでいる可能性があり，これを実証的手段で検証しなければならないと考えたからである．

4.3 実験結果

図 5 は， $P1(x^*)-P3(x^*)$, $Q1(x^*)-Q10(x^*)$ のパターンとの共起条件を評定してもらった結果を解析したものである．図 5 で橙，黄，緑はおのおの容認度が，区間 $[3.0, 2.5]$, $[2.5, 1.5]$, $[1.5, 0.1]$ にある項目を示している．

4.3.1 自然災害の類型

$P1, P2, P3$ との共起から，(20) の語群が (32) のグループに分かれているのは明白である：

- (32) a. $P1, P2$ との共起が非常によく $P3$ との共起が少し悪いもの: 洪水, 寒波, 大雪, 台風, 地震

n = 8		水害	風雪害	風害	地害	水害?	?	水害	地害	水害	水害	地害	水害	風害	風雪害	地害?
S =		洪水	大雪	台風	地震	寒波	日照り	津波	山崩れ	高波	大波	地滑り	波	嵐	吹雪	雪崩
P1	その国はその年, ___に襲われた	2.9	2.9	3.0	3.0	3.0	2.6	2.5	1.3	1.4	1.1	0.6	0.4	1.9	2.0	1.4
P2	その地域はその年, ___に襲われた	3.0	3.0	3.0	3.0	2.8	2.8	2.9	2.5	1.8	1.6	1.3	0.8	2.3	2.4	2.0
P3	その人はその時, ___に襲われた	2.1	1.9	2.4	2.1	0.4	0.4	2.5	2.8	2.6	2.9	1.9	1.8	2.8	3.0	3.0
	P1-P3の平均	2.7	2.6	2.8	2.7	2.0	1.9	2.6	2.2	1.9	1.9	1.3	1.0	2.3	2.5	2.1
Q1	その地方はその年, 貧困化の___に襲われた	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	0.3	0.0	0.0	0.6	0.1	1.9	1.5	0.6	0.3
Q2	その会社はその年, 資金不足の___に襲われた	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.1	0.3	0.0	0.4	0.9	0.0	1.4	1.5	0.0	0.0
Q3	その国の経済はその年, 株価暴落の___に襲われた	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.4	0.0	0.5	1.9	0.0	1.9	1.6	0.0	0.5
Q4	その国はその年, 景気後退の___に襲われた	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.5	0.0	0.8	2.1	0.3	2.1	1.5	0.1	0.0
Q5	その国はその年, 合理化の___に襲われた	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.3	1.1	0.0	2.9	1.9	0.0	0.0
Q6	その人々はその年, 赤狩りの___に襲われた	0.4	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.1	1.0	0.0	1.1	2.6	0.3	0.0
Q7	その国の政界はその年, 粛正の___に襲われた	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.3	1.1	0.0	1.0	2.9	0.1	0.0
Q8	その部署はその年, リストラの___に襲われた	0.0	0.1	0.1	0.0	0.3	0.0	0.1	0.0	0.4	1.4	0.0	1.4	2.9	0.5	0.0
Q9	その業界はその年, 改革の___に襲われた	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.5	0.0	0.5	1.9	0.0	1.9	2.6	0.1	0.3
Q10	その国はその年, インフレの___に襲われた	0.4	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.9	0.1	0.3	2.0	0.0	1.8	2.5	0.3	0.3
	Q1-Q10の平均	0.1	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.4	0.0	0.4	1.6	0.0	1.8	2.3	0.2	0.1

図5 “yがxのx*に襲われた”の容認度分布

- b. P1, P2 との共起が非常によく P3 との共起が非常に悪いもの: 寒波, 日照り
- c. P1, P2, P3 との共起が非常によいもの: 津波
- d. P2, P3 との共起が非常によく P1 との共起が少し悪いもの: 山崩れ
- e. P3 との共起が非常によく P1, P2 との共起が少し悪いもの: 高波, 大波
- f. P2, P3 との共起が比較的良好 P1 との共起が悪いもの: 地滑り
- g. P1, P2 との共起がかなり悪く P3 との共起が割りとよいもの: 波
- h. P3 との共起が非常によく P1, P2 との共起が少し悪いもの: 嵐, 吹雪, 雪崩

なお, これらの区別は水害, 風(雪)害, 地害のような災害の種別とは対応しないことには注意が必要であろう。

4.3.2 人為的災害を自然災害で喩える際の制約

図5に見られるQ1(x*)-Q10(x*)のパターンとx*の共起のパターンから, (21)の10項目の先概念に対し, (20)の15項目のうち, 基本的には〈(大)波〉と〈嵐〉のみが元概念になりうるが示されている。〈津波〉は〈(大)波〉の特殊な場合, 〈吹雪〉は〈嵐〉の特殊な場合であると解釈するのが妥当であろう。

重要な点は, (27)の概念メタファー〔社会災害は自然災害である〕が(日本)人の概念化のパターンの正しい一般化であるならば, もっと数多くのx*が元概念として機能してもい

いはずなのに、事実はそうになっていないという点である。

もう一つ興味深いのは、 $P(x^*)$ の容認性のパターンが $Q(x^*)$ に引き継がれるわけではないという点である。図 4 の容認度のパターンも参照のこと。P1 は (31) の V2, V3, V4 を、P2 は V4 を、P3 は V1, V2, V3 を実現しうるパターンである。

4.4 考察

4.4.1 結果の解釈

以上の結果は何を意味するのか? これは明らかに (33) を意味している。

- (33) a. 結果の解釈 1: 概念メタファー [[社会災害は自然災害である]] [= (27) の] は事実を正しく記述しない過剰般化である
- b. 結果の解釈 2: [[社会災害は自然災害である]] のレベルで過剰般化なのであるから、[[災害は自然災害である]] [= (28)] がそれ以上の過剰般化なのは、自明である。

これらが意味することは、次である:

- (34) 概念メタファーと呼ばれる現象を正しく理解するためには、(27) や (28) のような過剰般化を避けて、元概念と先概念とに共有されている (イメージ) スキーマ的構造がどんなものであるかを (メタファー的写像という「安易な説明装置」を仮定せずに) 正確に特定する必要がある。

以下では、意味フレーム基盤の視点でそれを試みることにする。

4.4.2 [x は〈嵐〉である] の意味制約

[x は嵐である] というメタファーが成立するのは、x に次のような特徴がある場合だと思われる:

- (35) a. x は人為性が高い災害で、被害者は、それが始まったら過ぎ去るまで待つしか対処方法がない。
- b. そのあいだは、被害を受けないように、身をなるべく小さく屈め、その場にじっとしているのが最善策である

{ 台風, 大雪, 吹雪 } は〈嵐〉の特殊な場合である。

4.4.3 [x は〈(大)波〉である] の意味制約

[x は(大)波である] というメタファーが成立するのは、x に次のような特徴がある場合だと思われる:

- (36) a. x は人為性は低い災害で、被害者は、自分の意思とは無関係の、強制的な境遇の変化を経験する。
b. その際、自己制御や抵抗は意味をなさず、何をしてもムダである。抵抗を放棄して、なすがままにするのが唯一の対処方法である。

{津波, 高波, 洪水, 山崩れ, 雪崩, 地滑り} は〈(大)波〉の特殊な場合である。

4.4.4 その他の場合の意味制約

{寒波, 日照り} も〈嵐〉の特殊な場合と見なしうるのかも知れないが、これは今回の調査からはハッキリしない。ただ、これらには〈嵐〉や〈(大)波〉にはない、独自のイメージもある。寒波は活動に必要な〈熱気〉や〈活気〉を〈喪失〉するイメージ、日照りは〈資源〉の〈枯渇〉のイメージに関係するように思われる。

地震は〈嵐〉の例でも〈大波〉の例でもなく、独自の自然災害の代表例となっているようだ。これは今回は調査から漏れた〈揺さぶり〉の例なのであろう。〈揺さぶり〉は〈嵐〉や〈大波〉にはない〈状況の不安定性〉を作り出す点で、それらとは異なるイメージをもっている。

共有される(イメージ)スキーマに関しては、他にもいろいろ説明すべきことはあるのだが、紙面の都合でそれが果たせないのは残念である。

5 終わりに

この論文で私は次の二つのことを示した。

- (37) 実例分析を通じて、Lakoff らの提唱する概念メタファー理論が過剰般化に導く不良理論であること、
(38) (概念)メタファーという現象を正しく記述するには、概念メタファー理論で有効性が主張される概念領域のあいだの写像は記述力が過剰であり、それよりも制約された意味フレーム基盤の説明がより有効な記述を提供すること。

付随的に、巧妙にデザインされた容認度評定課題の結果を数値解析すること(例えば図3, 4)で、メタファーのような微妙な現象に関しても興味深い結果を実証的に得ることができるというデータの解析手法の作新もなし得たと考える。

参考文献

[Fauconnier 1997] Fauconnier, G. R. 1997. *Mappings in Thought and Language*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.

- [Fauconnier & Turner 1996] Fauconnier, G. R. and M. Turner. 1996. Blending as a central process of grammar. In A. D. Goldberg (Ed.), *Conceptual Structure, Discourse, and Language*. CSLI Publications.
- [Fontenelle 2003] Fontenelle, T. (Ed.). 2003. *International Journal of Lexicography — Special Issue: FrameNet and Frame Semantics*, Vol. 16 (5). Oxford University Press.
- [Lakoff 1993] Lakoff, G. 1993. Contemporary theory of metaphor. In A. Orthony (Ed.), *Metaphor and Thought*, 2nd, 202–251. Cambridge University Press.
- [Lakoff & Johnson 1980] Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press. [邦訳: 『レトリックと人生』. (渡部昇一ほか 訳). 大修館]
- [Lakoff & Johnson 1999] Lakoff, G. and M. Johnson. 1999. *The Philosophy in the Flesh*. Basic Books.
- [Lakoff & Turner 1989] Lakoff, G. and M. Turner. 1989. *More than Cool Reason*. Chicago: University of Chicago Press. [邦訳: 『詩と認知』. (大堀壽夫 訳). 紀伊国屋書店]
- [黒田 2004] 黒田 航. 2004. 比喩は“経済的”で“合理的”だから存在する: Lakoff と Johnson の概念比喩理論への更なる異論. [未発表論文: <http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/metaphor-is-rationally-based.pdf>]
- [黒田・井佐原 2004] 黒田 航・井佐原 均. 2004. 意味フレームを用いた知識構造の言語への効果的な結びつけ. 電子情報通信学会技術研究報告, 第 104 (416) 巻, pp. 65–70. 電子情報通信学会. [増補改訂版: <http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/linking-1-to-k-v3.pdf>]
- [黒田ほか 2004a] 黒田 航・中本 敬子・野澤 元. 2004a. 状況理解の単位としての意味フレームの実在性に関する研究. 日本認知科学会第 21 回大会発表論文集, 190–191.
- [黒田ほか 2004b] 黒田 航・中本 敬子・金丸 敏幸・龍岡 昌弘・野澤 元. 2004b. 「意味フレーム」に基づく概念分析の射程: Berkeley FrameNet and Beyond. 日本認知言語学会第 5 回大会 Conference Handbook, 133–153.
- [黒田ほか 2004c] 黒田 航・中本 敬子・金丸 敏幸・龍岡 昌弘・野澤 元. 2004c. フレーム指向概念分析 (FOCAL) の目標と手法: Berkeley FrameNet を超えて. [未発表論文: <http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/focal-manifesto.pdf>]
- [黒田・野澤 2004a] 黒田 航・野澤 元. 2004a. 比喩理解におけるフレーム的知識の重要性: FrameNet との接点. [ワークショップ「メタファーへの認知的アプローチ」のための研究論文: <http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/metaphor-and-frames.pdf>]
- [黒田・野澤 2004b] 黒田 航・野澤 元. 2004b. 口頭発表「比喩理解におけるフレーム的知識の重要性」にフロアから出た質問に対する公式回答. [<http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/metaphor-and-frames-replies.pdf>].
- [黒田ほか 2004d] 黒田 航・野澤 元・中本 敬子. 2004d. 比喩写像における「領域」は単なる副作用である: “y が x に襲われた” に関する比喩写像の成立条件. 日本語文法学会 第 5 回大会発表論文集, 205–214. 日本語文法学

- 会. [増補改訂版: <http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/domains-are-derivative-rev1.pdf>]
- [谷口 2003] 谷口 一美. 2003. 認知意味論の新展開: メタファーとメトニミー. 研究社.
- [中本ほか 2004a] 中本 敬子・黒田 航・野澤 元・金丸 敏幸・龍岡 昌弘. 2004a. FOCAL/PDS 入門: フレーム指向概念分析/並列分散意味論の具体的紹介. [未発表論文: <http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/introduction-to-focal.pdf>]
- [中本ほか 2004b] 中本 敬子・野澤 元・黒田 航. 2004b. 動詞「襲う」の多義性: カード分類課題と意味素性評定課題による検討. 認知心理学会第二回大会口頭発表, 39. [<http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/Nakamoto-et-al-CogPsy2004-Original.pdf>]
- [鍋島 2002] 鍋島 弘治郎. 2002. GENERIC IS SPECIFIC はメタファーか: 慣用句の理解モデルによる検証. 日本認知言語学会第 2 回 Conference Handbook, 141-148.
- [鍋島 2003] 鍋島 弘治郎. 2003. 領域を結ぶのは何か: メタファー理論における価値的類似性と構造的類似性. 日本認知言語学会論文集第 3 巻, 12-22. 日本認知言語学会.
- [野澤 2004] 野澤 元. 2004. メタファーと適応的行動: 言語使用の行動生態学的アプローチ. 日本認知科学会第 21 回大会発表論文集, 126-127. 日本認知科学会.